

同盟創立八周年記念式を舉行

榮の岩永賞授與及び勤績者表彰

同盟創立八周年記念式は菊花香る十一月七日午前十時より本社別館會議室において厳かに舉行された。定刻正面壁間に大日章旗燦として電光に映ゆるところ、國民服に身を固めた古野社長は靜に壇上に進まれる。前方左側の本社幹部席には常務理事、局長、局次長來賓諸氏が晴れやかに居流れ、右側地方幹部席には折柄總支社長局長會議議列のため滞京中の南方および支那三總局長、各支社長、主要地支局長が整列、また職員席には本社主任以上の職員が肅然と着席、一同は白仁秘書の司式に従ひ一齊に起立して敬禮する。

國民儀禮の後、古野社長は挨拶をなし、決戦下敵意破權に邁進するべき同盟の大使命を強調し、諄々と説き進まれる。

感銘深き社長の挨拶が終るや、岩永賞授與を行ふ。受賞者田中、板垣兩參事ならびに現地三君代理田中參事に對し社長は手づから榮の賞を授けられる。次いで勤績者表彰に移り、二十五年勤績者多參事以下、二十年勤績者本經濟局長以下に對し社長はそれぞれ表彰状および勤績賞を授與された。かくて岩永賞受賞者代表田中參事、勤績被表彰者代表多參事よりそれぞれ真心こめた答辭あり、十一時白仁司式者閉會を宣し、晴の式典は滞りなく終了した。

受賞者氏名

- △岩永賞受賞
 - 田中正太郎 (編輯局整理部長)
 - 板垣 武男 (編輯局内經部長兼編輯局文化部長)
 - 佐藤 啓之 (編輯局勤務社員)
 - 渡邊 孟次 (マニラ支社 同)
 - 藤原 文雄 (蘭貢支社 同)
 - △二十五年勤績被表彰者
 - 勢多左武郎 (海外局參事)
 - 村木 政吉 (經濟局副參事)
 - 渡邊 銚 (總務局 同)
 - 山田清一郎 (九江支局長)
 - 高橋 勇 (神戸支局長)
 - △二十年勤績被表彰者
 - 稻本 國雄 (經濟局次長)
 - 下條 雄三 (編輯局特信部長)
 - 杉 勝 (聯絡局同報主任)
 - 樋口徳治郎 (總務局副參事)

賞状

坂井 金二 (總務局資材部勤務 社員)
 寺尾要次郎 (總務局副參事)
 佐藤 一雄 (經濟局通報部勤務 社員)
 小座間 茂 (新潟支局長)
 小原磯太郎 (スラバヤ支局長)
 荒川 穆 (福岡支社寫眞部長)
 吉谷 清次 (金澤支局勤務社員)
 李 誠 敬 (臺北支社 同)
 青木 富雄 (長野支局 同)



編輯局整理部長 田中 正太郎

使命を帯びて、整理部が新に出発するに當り、君は初代部長たる重責に任じ、爾來今日に至るまで早出晩退、自ら終日朱筆を握つて陣頭に立ち眞に精根を盡して能く整理部の礎石を不動ならしめたり。範圍頗る廣大にして其の内容は複雑錯綜せる、尅大量の原稿を極めて短時間に處理し、又社内外各方面との打合せに、地方及び現地の連絡に、指令に、一絲亂れなき総合的配慮を行ひ、能く部員を指揮掌握し、整理部設置の目的を完遂せり。



經濟局内經部長兼編輯局文化部長參事 板垣 武男

昭和三十五年十月本社職制改革に依り、編輯局の中樞機關たる重大

昭和三十六年内經部長に任ぜらるるや、激變する時局に即應し、我が經濟通信の前途に新生面を開くため社命を體して産業別通信の創始に當り、草創に附隨するあらゆる困難を排除し日夜徹まず、遂に重工業、交通・運輸、纖維・化學映畫・藝能の各版を完成し儼然たる新事業の擴張に伴ひ、印刷所の自營の必要痛感せらるるや、再び率先邁進快刀亂麻を斷つが如く萬難を克服して之が新設に當り、遂に短日月の中に目的を達成せり、是れ挺身難に赴くの氣魄と初志必ず貫徹を期する實行力の然らしむる所にして功績極めて顯著なり。仍つて茲に岩永賞を授與し表彰す。

社長訓示(前頁より)

燃え立つ若き血潮

これも身近な話だが、この間相良君(註、前海外局參事)の長男が戦死されたので「お國のためながら誠に惜しいことをされた」といふ悔みをいつたところが、相良君も急に改つて「いやもうわれわれの年輩の連中が一番屑ですよ」といふ。きいてみると長男が戦死し、次男は軍屬で南方へ行つてゐるが、三男坊は飛行機に乗るんだ四男坊は戦車だといつて夢中になつて母親が何と口説こうが問題にしない。國難に赴く牢固たる決意は親を驚かせてゐる。われわれの年輩が一番人間の屑だといつて彼はしみじみ述懐してゐた。

私が山東の前線を視察したとき、吾々の若き同僚であつた中島幸基君が應召従軍し、三度目の負傷で青島の病院に收容されてゐたのでこれを見舞つた。君は戦場で三度も負傷したのだから、今度は早く傷が癒つて凱旋が出来るといふ「な」といふ話をする、白衣の中島幸基君は「いや社長、私は内地へ歸る心算はありませぬ。一緒に戦つてきた戦友の大部分は戦死して、もう何名とか残つてゐませぬ。私は傷が癒つたら一日も早く部隊に戻つて、さうして戦友と共に御國のために命を捨てねばなりません」といふ返事をきかされた。前線の氣持を想ひ起しながら東京へ歸ると私の長男の同期性が戦死したといふことで悔みに行く、またそのお母さんは曰く「いや、お母さんがおめおめ泣いてゐるのは私共のやうな年寄りの親達だけで、本人は本當に喜び勇んで

戦場で仆れて呉れたことと思ひます」といふ答をまたきかされたのであつた。

民族の血脈に漲る必勝信念

こんなことは數へれば數限りもないこと、諸君も體驗してをられると思ふが、本當に日本民族の血の中には民族のためにこの戦争を勝つまで戦ひ抜かんでどうするかといふ血が湧き起つてゐると思ふ。自分自身の立場とか、命だとか、家だとかいふものはもう眼中にない。自分の、個人的立場を捨て、家のために、村のために、藩侯のために殉ずるとかといふ段階から一步一歩成長しつつ、今日日本民族一人一人の血潮は民族全體の生命のためにいつても犠牲になることを喜び勇んでゐるといふ、この面魂が國民一億の血潮の中に漲つてきたといふことが最近のこの民族の姿であると考

この國內的思想戰の使命を帯びまた米英の戰意を徹底的に破碎撃滅すべき對外的思想戰の任務を負うてゐるわれわれは一億國民に先立つてこの行くべき民族の方向をしつかり把握して、さうしてわれわれの職場で最善を盡さなくてはならぬ。それだけがわれわれ同志五千に課された唯一の任務であるこの目的を遂行するにどうしたらよいかといふことを中心に諸君はこの會議で十分論議して頂きたいといふことをお願いして閉會の挨拶に代へる。(昭和十八年十一月四日)

使命達成に總力を結集せよ

この點についても大きな國家の危局に直面して重大な國家的使命を負つてゐるわれわれ同志として最善の工夫と眞剣な努力によつてこの大使命の達成に對外的にも對內的にもやつて行かなければならぬ。

どうぞそれぞれの部署においてこの一つの目的に、ある限りの智慧を絞つて、ある限りの努力を集めて、眞直ぐに進んでもらひたい。この觀點に立つて十分の論議を盡して頂きたいと思ふ。會議の初頭に當つて戦争完遂のためわれわれが持つ使命の達成、この一點に全部の論議の中心を置いて頂きたいといふことをお願いして閉會の挨拶に代へる。(昭和十八年十一月四日)



編輯局勤務社員 佐藤啓之 今次大東亞戦争を通じて戦況

最も苛烈を傳へたるガダルカナル作戦に従軍記者として参加する君は、情況愈々慘烈化となり、各社同僚記者が漸次戦場を抛棄するに至りたる時、獨り毅然として現地に踏み止まり、マラリヤと脚氣とに悩みつつも死生を超越し、報道任務に心身を捧げ、作戦軍参謀として噴賞を惜まざらしめたり。



マニラ支社勤務社員 渡邊五次 君は支那事變直後、任を中

南支總局に受けて上海に赴くや、曩に本社外總部に在りて日々練磨せる其の職能は、取材に編輯に忽ち珠玉の光を發して、東亞經濟通信の基礎確立に貢献する所甚だ多し。次いで大東亞戦争勃發し、皇軍の比島に進駐するや、君亦之に従ひてマニラ支局に轉じ、専門知識を傾けて比島經濟全般の報道に遺憾なきのみならず、政治社會諸般の取材編輯の上にも進んで協力し、終始一貫、報道報國の同盟精

神を發揮して餘すところなし。君資性篤實明朗、事に當れば堅忍不拔、與へられたる責務を果さずんば止まず。誠に青年社員之範となすに足る。仍つて茲に岩永賞を授與し之を表彰す。



支社社員 藤原文雄 昭和十七年八月、蘭貢支局

に赴任するや、其の草創時代に在りて克く同僚と共に支局長を扶けて克く同僚と共に支局長を扶けて、英支通信の特殊地位に鑑み、英文通信を發行し、熾烈なる空襲下に身を曝しつゝ現地大衆に呼び掛くと共に、ビルマ行政府始め放送局、新聞社等に正確なる世界情勢を把握せしめ、敢然として思想戦を戦ひ抜き、同盟が會つて同地に君臨せるロイターに遙かに優越せる點を官民一般に認識せしむ又病魔を推してアラカン作戦に従軍し、幾多の困難に遭遇しつゝ最後の一人となるまで報道戦線を守りて、誠心旺盛なる精神力と絶大な責任感に基くものにして、報道戦士の範となすべし。仍つて茲に岩永賞を授與し之を表彰す。

答 辭

岩永賞受賞者代表答辭 岩永賞受賞者を代表して一言御禮の御挨拶を申し上げます。本日輝かしい本社創立八周年記念式典に當り、圍らずも岩永賞授與の光榮を拜し、寔に有難く度んで御禮を申し上げます。願ひまするに私共は社の命に盡ひ同盟社員として當然爲すべき職



同盟物故職員慰靈祭執行

同盟物故職員慰靈祭は十一月七日午後二時より本社別館會議室に於いて厳肅に執行された。祭場正面に本年度物故三十九霊を含む百十八霊をまつる齋舎を設け齋主官幣大社日枝神社神職、古野社長、山委員長以下各常務理事、局長、局長、本社主任以上の參事、副參事等列席御遺族故岩永前社長遺子清子嬢等四十九名、また來賓滿洲國通信社、日本新聞會、日本映畫社、日本電報通

祭場に着く 一、修祓 一、招魂(警蹕管攝) 一、獻饌(此の間奏樂) 一、齋主祝詞 一、社長答辭 一、齋主玉串を授り拜禮(齋員列拜) 一、古野社長同上 一、遺族全員同上 一、來賓(滿洲國通信社、日本新聞會、日本映畫社、日本電報通信社各代表) 同上 一、各常務理事、職員總代同上 一、撤饌(此の間奏樂) 一、送魂(警蹕管攝) 一、島山委員長挨拶 一、各退下

社長答辭

本日茲に祭壇を設けて我が同盟通信社物故職員慰靈祭を執行し初代社長故岩永裕吉氏以下百十八柱の靈を祀る。顧みるに我が同盟通信社は昭和十年十一月七日を以て我が國唯一の國家代表通信社として創立せられ、年を閱すること滿八年、國運の興隆と共に社業益々隆昌、今や五千の同志を擁して晝夜を分たす外に日本の正義を宣べ、内に世界的情勢を告げ、一意報道報國に邁進しつゝあり。而も昭和十六年十二月八日皇國の興廢を決すべき大東亞戦争の勃

動績被表彰者答辭

昭和十八年十一月七日 被表彰動績者代表 海外局參事 勢多左武郎 田中正太郎 御禮の言葉といたします。これをもつて御禮の言葉といたします。

務を遂行し、大過なく今日に至りました。是れ偏に社長はじめ各常務理事、先輩の方々の御指導と御鞭撻により、又同僚諸氏の御協力によりますものと、日々感謝の念を以て御奉公いたして参つたところ、今回却つて御重なる表彰の榮を辱ふし、唯々感激に堪へない次第であります。今や戦局は益々苛烈を加へ、同盟の使命亦愈々重大なるを覺ゆるとき、私共は今日のこの感激を深く胸に刻み、新たなる決意を以て思想戦士の一員として、微力を盡し、以て社恩に報いたいと念じ居る次第であります。甚だ簡單であります、之を以て御禮の言葉といたします。昭和十八年十一月七日 岩永賞受賞者代表 田中正太郎

發するあり、戦局の進展に伴ひ前線の戦況報道に、南方通信網の擴充に、更に又海外への宣傳に、我が社の負荷する任務愈々重きを加へ、國際思想戦に於ける我が社の使命益々大なるを痛感、斯る千載一遇の機に、我が社に職を有して史上未曾有の大戦に一身を捧げ得るは社員一同寔に感激措く能はざる所なり。 惟ふに我が社の今日あるは先輩同志の獻身的努力に負ふ所多く特に故岩永前社長は夙に今日の時局を洞察し、我が國に強大なる國家代表通信社なるべからずと斷じ、烈々たる信念を貫くこと實に十有餘年、遂に其職に殉ぜらる。又故岩永前社長の下にありて、相共に社業に盡せる同志にして物故せる諸氏の中には藤岡、柳澤花房、下津、鈴木の諸氏の如き、今次征戦に従軍して殉職戦死者もの五柱の外、筆を劍に代へて應召殉國せる井上、森、松田、藤森、長坂、寺田、阿部、百井、矢武、木村、瀨藤の十一柱あり、其の外一身一家を忘れて社業に専念、病致せる幾多の功勞者あり。我が同盟の今日あるは、之等物故者の功に據る所洵に多大なるものあり。我等は茲に恭しく感謝の誠を捧ぐるものなり。 今や諸氏と共に相携へて報道報國の大任を遂行すべき途なしと雖も、我等は誓つて諸氏の貽せる遺志を繼承して一致協力、大東亞戦争完遂と大東亞建設必成のため更に全力を致して皇國に報いむこと期す。冀くは在天の靈、來りて我等が微衷を享け、我が社の任務完遂に庇護を垂れ賜はんことを。 本日を以て我が物故の同志功勞者の靈を祀るに當り謹んで奏す。 昭和十八年十一月七日 社団法人同盟通信社 社長 古野伊之助

辭 令

大阪支社長參事 結束武二郎
大阪支社總務部長兼務を命ず
大阪支社總務部 高間 俊一
會計主任副參事
大阪支社總務部長兼總務部會計主任を命ず
大阪支社總務 松野 喜作
部長參事
總務局勤務を命ず
名古屋支社
勤務社員 加藤 義春
岐阜支局長を命ず (十月六日附各通)
札幌支社勤務社員 花田爲次郎
札幌支社通信主任を命ず
ローマ支局長事 佐々木 一
務取扱副參事
ベルリン支局勤務を命ず (十月十八日附各通)
編輯局勤務社員 太田政次郎
南方總局臨時在勤を命ず (七月二十八日附)
聯絡局同 勝田 丙吉
編輯局勤務を命ず 松坂 隆吉
總務局同
經濟局勤務を命ず
編輯局同 内田 貞雄
編輯局勤務准社員 和田 芳郎
聯絡局勤務を命ず (九月一日附各通)
岐阜通信部 奥野常次郎
駐在社員
名古屋支社勤務を命ず (九月六日附)
總務局勤務副參事 神坂 鶴太
經濟局勤務を命ず (九月廿五日附)
南方總局勤務 古閑統一郎
准社員
編輯局勤務を命ず (九月廿八日附)
編輯局東亞部 安藤 利男
次長副參事
ジャカルタへ出張を命ず (九月三十日附)

十日附
編輯局勤務社員 秋葉 武雄
海外局勤務を命ず
總務局同 岡田 博
聯絡局同 藏田 耕三
編輯局勤務を命ず 松本 茂
横濱支局同 山田壽榮男
南方總局勤務准社員 津田 章
總務局勤務を命ず (十月一日附各通)
北支總局勤務を命ず (十月一日附各通)
北支總局同 鮎澤 周太
開封支局勤務を命ず (十月二日附)
經濟局同 堀田 榮
編輯局勤務を命ず (十月四日附)
海外局同 高橋 武雄
關東支社勤務を命ず (十月五日附)
編輯局同 金井 義元
聯絡局同 原澤 幸子
經濟局勤務准社員 浦野多美子
同 寺尾壽美子
南方總局勤務を命ず (十月八日附各通)
漢口支局勤務社員 宇都宮 要
中支總局勤務を命ず 戸田大八郎
南京支局同
漢口支局勤務を命ず
中支總局同 有坂辰一郎
南京支局勤務を命ず (十月十一日附各通)
聯絡局同 足立 誠市
高知支局勤務を命ず (十月十二日附)
南方總局同 勝尾 信一
關東支社勤務を命ず
聯絡局同 宮内 くに
同勤務准社員 小山 重子
南方總局勤務を命ず (十月十四日附各通)
石門支局同 杉山俊次郎
北支總局勤務を命ず
レガスピー支局同 眞山 行雄
マニラ支社勤務を命ず (十月二十日附各通)

一日附各通
總務局勤務社員 小山 正美
南方總局勤務を命ず
大阪支社勤務准社員 柳井 露子
神戸支局勤務を命ず (十月二十二日附各通)
日附各通
編輯局同 立石 富雄
京城支社勤務を命ず
京城支社同 石黒喜代治
編輯局勤務を命ず (十月二十三日附各通)
社員を命ず經濟局勤務を命ず
香港支局勤務社員試用 片島 多門
社員を命ず
聯絡局勤務准社員試用 伊藤 貞雄
同 堂田 要三
同 吉田 正隆
同 田島 次郎
同 丸山 益郎
同 尾崎 義雄
同 島村 秀雄
同 威興支局同 尾崎 義雄
同 南方總局同 島村 秀雄
同 マカッサル支社同 新藤利太郎
准社員を命ず (九月一日附各通)
聯絡局勤務准社員 岡村 健一
社員を命ず編輯局勤務を命ず
編輯局試用社員試用
經濟局同 上澤 光司
大阪支社同 山田 憲吉
關門支社同 武藝 敏三
中支總局同 後藤 芳彦
大阪支社勤務准社員 吉川 清
關門支社同 梅田 達香
關門支社同 山本 五郎
社員を命ず
大阪支社同 角住 富夫
京城支社同 松本 判禮
札幌支社同 澁谷 澄子
釧路支局同 岡部 肇
小倉支局同 岡部 肇
平壤支局同 福間 嘉夫
神戸支局同 片山 貞子
准社員を命ず (十月一日附各通)

編輯局同 菅野 庄一
社員を命ず (十一月一日附)
海外局の事務を囑託す (九月九日附)
聯絡局の事務を囑託す
リタ・ダギノ
森田 秀三
經濟局の事務を囑託す
高田 俊
金澤支局の事務を囑託す (十一月一日附各通)
旭川支局勤務社員 大津 慶吾
依願解職 (八月二十一日附)
名古屋支社勤務准社員 塚田 清
依願解職 (九月四日附)
大阪支社勤務社員 達 泰忠
依願解職 (九月十一日附)
中支總局同 菅沼不二男
滿洲國通信社へ歸還のため解職 (九月十五日附)
大阪支社同 揖野 強介
依願解職 (九月二十日附)
臺北支社同 飛松 喬
同 塚本堅一郎

依願解職 (九月二十五日附各通)
經濟局勤務准社員 阿部カヨ子
大阪支社同 福田富美子
同 片岡 敏子
依願解職 (九月三十日附各通)
神戸支局同 柴田さめを
依願解職 (十月四日附)
編輯局同 佐藤シゲ子
依願解職 (十月十三日附)
海外局華文部副主任 許毓彬
經濟局勤務准社員 加藤 良子
依願解職 (十月十五日附各通)
大阪支社同 飯塚 靜子
依願解職 (十月十八日附)
編輯局同 山本マサ子
依願解職 (十月二十七日附)
南支總局同 王 騰 芳
京都支局囑託 陳 樹 枝
依願解職 (十月三十一日附各通)
岡山支局勤務社員 今川 正美
戰死 (八月二十二日)
北支總局囑託 松村 利男
死亡 (九月二十三日附)

職員戦争死亡傷害保険制度實施

今回わが社は臨時職員戦争死亡傷害保険制度を設け十一月一日より實施された。第一回は差當り左記地域在勤の職員に對し加入契約が行はれた。

豊原、釧路、旭川、札幌、小樽、函館、室蘭、青森、仙臺、東京、川崎、横濱、名古屋、京都、舞鶴、大阪、神戸、廣島、下關、關門、小倉、福岡、長崎、釜山、那覇、臺北、臺中、臺南、高雄、花蓮港、漢口、廣東、香港、汕頭、厦門、海口及び南方各地

今回の戦争死亡傷害保険の契約は日本團體生命保險會社に本社において一括して行はれたが、既に

會社の戦争死亡傷害保険に加入契約をなすもの。但し外國人たる職員を除く。

第二條 保險金は左の區分に依る一、社員及社員に準ずる有給日勤務 五千圓
二、准社員及雇員 二千圓
前項第二號に該當するもの第二號に該當するに至りたるときは次の契約更改期に於て其の保險金を五千圓に變更す

第三條 保險料は本社に於て全額支辨す

第四條 保險證券は社長之を保管す

第五條 被保險職員にして事故發生の場合は昭和十八年三月四日大藏省令第十號戦争死亡傷害保險法施行規則 (以下單に規則) 第二十條の規定に準據し本社に於て保險會社に對し保險金請求の手續を行ひ保險金を當該被保險職員又は規則第十四條に規定されたる者に支拂ふものとす

第六條 本社各局長又は總支社長は被保險職員に事故を生じた場合は速かに左記書類を添へ社長宛保險金請求申請をなすべし

一、保險金支拂請求書及領收書
二、死亡又は傷害證明書 (傷害の場合は傷害の程度を詳記したる書類を含む) 軍、官、公吏又は醫師に依り作成せられたるもの
三、被保險職員の戸籍謄本
四、保險金受取人の印鑑證明

第七條 本規程は昭和十八年十一月一日より之を施行す

第八條 新規契約に關する取扱は毎月末に一回之を行ふものとし第一回は昭和十八年十月末に全職員に對し新規契約をなすものとす。但し空襲の危険なしと認むる地域に在勤する職員に付ては契約を延期することを得

本社産報宮城遙拜行進

十一月八日大詔奉戴日に當り同盟産業報國隊は古野隊長總指揮の下に午前七時五十分日比谷公園廣場に勢揃ひし、折柄總支社長會議で滯京中の總支社長等と交へ本部、地方代表、青年隊、第一乃至第五大隊、女子隊の順に一千五百の大行進を展開した。しかして宮城二重橋前に到り遙拜、聖壽萬歳を祝し奉り、併せて思想戦々士として職域取組の誓を新し、再び隊伍を整へ同八時四十分本社前に歸着散會した。(寫眞は陣頭指揮の古野隊長と隊旗、隊列)

産報練成會に参加

東京産業報國會九ノ内支部では十一月四日、五日の兩日、東村山修養園道場で練成會を開催したが同盟産報からも麻生厚生部長、青木通報兼商通部長、秋山編輯局參事、竹市安保、中住、高各部長等十氏が參加した。寒風をものともせず襪に諸行事に整然として同盟人の眞價を發揮して主催者側を感激せしめた。

大阪支社にて

技術講習會開催

時局下科學知識の普及徹底を期して大阪支社では社員に自動



車と側車操縦、無線電信操作、寫眞撮影の技術を教へ込もうといふ前例のない講習會を開催した。受講者は約二十人、十月十一日閉講、十一月中旬終了の豫定である。

舞鶴支局 移轉

舞鶴支局は左記に移轉した。

舞鶴市桃山通羽崎七一九

メナド支局開設

今般セレベス島北部メナドに左の如く支局を開設した。

メナド市辨天廣場前

岐阜支局 開設

今般岐阜市に左の如く支局を開設、十月一日より業務を開始した

岐阜市今小町二二(岐阜合同新聞社内)



〔九月分〕

△結婚

- 加藤 義郎 (經濟局)
井上 達 (南京支局)
藤田 一夫 (編輯局)
岡田 博 (同)
黒川 錫次 (名古屋支社)
廣瀬 勤次 (神戸支局)
東岸 敏丸 (廣島支局)
藤田 義昌 (甲府支局)

△出生

- 松尾 信 (聯絡局) 次女
徳山 辰作 (同) 長男
濱田 健二 (編輯局) 同
鈴木 力 (南方總局) 長女
日高 定雄 (經濟局) 同
田中三之助 (總務局) 次男
山口 由松 (横須賀) 長男
干 芝 雲 (海外局) 長女
宮城 春生 (北支總局) 同
横地 倫平 (大阪支社) 三女
漆原 治 (同) 同
中村 利直 (名古屋支社) 長男
柴田 龍介 (福岡支社) 次男
瀧谷 好次 (札幌支社) 三男
木下 益忠 (松山支局) 長女
得能 益忠 (高知支局) 三男
森田 勇 (熊本支局) 同
荒木 世界 (東北支社) 同
藤井 千年 (東北支社) 同
田村孝逸郎 (同) 長女
安田 操 (同) 同
吉田 秀夫 (釜山支局) 長男
元 明贊 (釜山支局) 三男
高橋 清 (廈門支局) 同

- △應召・入營
山田壽榮男 (編輯局)
林 一郎 (同)
吉田哲次郎 (同)

Table with columns for names, locations, and roles. Includes names like 越野 清安, 黒田 泰清, 平川 八郎, etc.

Table with columns for names, locations, and roles. Includes names like 兒島 又喜, 大場 健次, 白井 秀光, etc.

Table with columns for names, locations, and roles. Includes names like 山本 滋雄, 山本 金造, 大橋 孝, etc.

鳥取の地震

同盟無線の活躍

大阪支社 通信部長 日笠多賀之助

臨時支局を開設

九月十日夕鳥取市を中心として突如発生した地震は同市の全戸数約一萬戸の過半数を臨時にして叩きつけ、且つ多数の人命を奪ひ去るの惨禍を見たが、しかし市民は決戦下日本國民の逞しい歸魂をたぎらせて復興へ、新生鳥取建設へと力強い敢闘が全市に展開されてゐることは誠に頼母しいことである。

假事務所を設置

激震と共に市内西町の日本海新聞社は印刷工場が全壊し、別館製版所全壊、編輯、營業の本館は半壊といふ大被害を受けて新聞の發行不能となつた。同業「日本海」の罹災を知つた岡山の合同新聞は相互援助協定により救援に乗り出し、十三日から一日二頁の「日本海新聞」を代行製作するの美事にした。

わが社にあつても同地方の復興に協力するため鳥取市に臨時同報無線受信支局を開設することとなり、私等一行(林社員、野村准社員、丹羽員並に大阪中電より特別應援の市川無線技士)五名の無線ニュース速報班が編成派遣された。

リュツクを背に出発

以下は今次震災に際し編成された同盟無線ニュース速報臨時支局開設と隣組末端に至るまでのニュース配布徹底方法についての経過報告である。

一行五名は非常用オートデザイン受信機を始め通信發行に要する事務用品その他を詰め込んだ大リュツクサツクを背に十三日二十一時三十分大阪驛を出發した。

途中姫路驛で乗替へたが、こより鳥取への約五時間半の列車内は各地より救援に急行する警防團員、青年團員その他の見舞客等であらうと見られた。五時半無事鳥取驛に到着したが、驛頭第一歩眼に入つたものは丸吉百貨店のドス黒く焼け残つた五層樓だ。

一行は將棋倒しに薙ぎ倒された民家の残骸に埋まる街衢の兩側の惨狀に驚異の眼をみはりながら日本海新聞社の假事務所に向つた。この假事務所は殆ど全壊の厄に遭つた日本海新聞社より一軒置いた隣の洋服店であつたが、不思議にも倒壊を免れてゐた。然し四圍の壁には不氣味な龜裂が縦横に走つてゐた。その部屋は非常に手狭で、その上既に岡山の合同新聞がその一角に陣取つて臨時支局を開設してゐた。

全滅にひとしい街に恰好な事務所が急に手に入る筈もない。一刻も早く通信發行の準備が第一なので止むなく狭い部屋へ無理な割込みを強行した。そして受信機の取付、謄寫版の配置など萬般の手配を整へた。この同盟の強行割込みによつて日本海の編輯機は街路にまではみ出すといふ氣の毒なこととなつた。

直ちに受信成功 斯くして受信可能を見とどける

と共に縣廳に武島知事を訪ひ、先づ社長代理として今次震災に對するお見舞を述べると共に同盟無線臨時支局開設に對する社長の意思を詳細に傳へたのち、岡村警察部長、小橋特高課長とも懇談してニュース配布に對する希望を述べ、且つ種々打合せを遂げて支局に引返した。

この時既に「安藤内相の閣議に於ける震災地視察報告」、「ヒツトラー、ムツソリニ兩巨頭の會見」、「敵機香港、廣東へ來襲等々の重要ニュースが刻々として受信され、逸早く同盟ガリ版第一信は縣廳、市役所、警備區司令部、中部軍出張所、憲兵隊、舞鏡陸上救援隊、廣邊鳥取工務局、裁判所、翼贊會支部等へ丹羽員が自轉車を飛ばして速報した。一方これと同時に新聞社の手によつて市内九要所にも貼出されて無事着鳥第一日の仕事を終つた。

ところが翌十五日朝八時半の第一回放送がどうしたにかキヤツチ出来ない。市川技士も點檢に懸命だが、うまく行かない。このときふと私の頭に浮んだのは前日列車内から望見した大アンテナと放送局であつた。私は市川技士と共に受信機を抱へて放送局に飛び込み菅江局長にこれが點檢、修理を頼んだ。そしてさらに萬全を期するため同放送局の専用電話を拜借して岡山放送局經由で同盟岡山支局の豫備機即刻携行方を依頼した。

意外な受信機故障

受信機の故障箇所は放送局技術部において點檢の結果パワートランスの障病であることが判明した。私は機械については全く素人であるが、同個所の故障は概ね濕氣を引くことによつて生ずる場合が多いといはれてゐる。事實同機は非常用として〇〇ビルの地下室に保管されてゐたのがこの失敗を見る原因となつたやうである。受信機の保管と濕氣の防止、この點については各支局において十分注意されてゐることと思ふが、一行今回の苦しい經驗を特記して置くと共に是非平時において機器の保管調整はもちろんのこと、時々豫備機のテスト受信を必要とするであらう。

死物狂ひて活動開始

前記のごとく不良個所の判明によつて早速電池受信に切替へ、漸く十一時半の放送より受信を開始することが出来た。そこで縣廳に赴き小橋特高課長とニュースの配布について懇談を重ねた結果、一日三回(正午、午後二時半、同五時)百町會を通じ隣組の末端まで徹底させることとなり、これがニュース連絡の責任を新豫備大佐(縣廳で市役所において復興指導の采配を揮つてゐる人)にお願ひすることになつたが、これは一行の手としては大變な重荷であつた。しかし墓に鷹野縣局長よりも「同盟の國家的使命を果すのはまさにこの秋である」との激勵電を受けてゐる。

且つ鳥取放送局は十四日より放送を開始してはゐたものの、それは恰も聲に物をいつてゐるのと同然であつたのだ。即ちこの放送は極く限られた一少部分の主要方面の人々のみが聞き得るものであつて、一般市民には通じなかつたのである。何故なればあの地震と共に肝心のラジオ・セットが吹ッ飛び、破壊されてゐた。よし完全なセットがあつたとしても電燈線に電氣がなくなつては聞える筈もないのである。

以上われわれ來鳥の使命に鑑み頭張らざるを得ないのである。そこで最初の豫定計畫であつた前記方面への速報或は貼出しだけに止めずさらに無理強行に乗り出し、受信に、ガリ版に、仕分にと大馬力をかけた。

ニュース速報の手段

ガリ版ニュースはどうして隣組へ速報、傳達されてゐたか。右につき新大佐に説明を聞くと「同盟より特高課へ速達されたガリ版ニュースは即刻自分の手許(市役所)に廻送されて来る。さうするに定められた時間に自分のところに集つて来る市内六校區の區長にそれぞれその校區内の町會數に應じて配分、區長は同様に町會事務所に參集する隣組班長に對しガリ版ニュース中の重要なもののみを口達し、即時隣組員に傳達させ、他のガリ版ニュースは直ちに町會事務所の特設掲示板に貼出させることになつてゐる。この一日三回の町會掲示板のニュース貼出しについては豫め隣組の人々にも徹底させてあり、且つ生活物資は町會事務所より配給されることとなつてゐるので人の集りは多く従つてニュースの徹底は萬全である。」

岡山支局へ手配の受信機も十五日夜には無事到着し、テストの結果は頗る上々、心細かつた残り少い手持ち電池受信の心配も全く解消した。(その後においても送電系統の根本的回復を見ないためか、時々起る長時間の停電や、夜間における電壓降下のため電池に頼らなければ完全な受信が出来ないことが度々あつたので、かうした際

には電池の携行が是非必要であることが痛感された)その後仕事も順調に進み、第一日の二十本は第二日において三十二本となり、第三日目には四十八本といふ速報成績を得た。

目的達成し支局閉鎖

かくて私のなすべき仕事も大體終り、且つ現地報告のため社長命により上京することになつたのを機會に連日頑張り通す市川技士の過勞を察して交替を勧めたが、同君は斷乎支局閉鎖の日まで任務遂行の決意を述べた。また當時母御の病重しとの飛電に接した野村准社員に歸阪を促したが、これまた肯せず頑張り通した。

この間、この旺盛なる責任感に徹した奮闘に加へ、本社よりの適切な震災復興關係ニュースの放送により臨時支局開設の使命は完全に達せられたのである。かくて二十五日支局閉鎖と共に「コンカイノ、シンサイニサイシナガイニユースノソクホウニ、ミンシンノシドウニ、ヒトカタナラス、ゴコウハイラタマハリ、カンヤニタヘズ、ホンヒジムシヨラ、ヘイサセラルニ、アタリ、アツクオレイモウシラゲ、アワセテ、セウライトモ、ナニブンノゴエンジヨラ、オネガヒモウス、ナホカンケイ、カタホウメンニタイシテモ、ヨロシクゴデンタツコフ」

との武島知事よりの感謝電に接し、仕事の結末を飾ることが出来た。終に臨み今回の同盟臨時支局の開設活動に對し十分の御理解をもつて援助、便宜を與へてくれた通信當局、放送局をはじめ軍官民各方面の御厚情に對し深く感謝の意を表したいと思ふ。

秋の總支社局一日鍊成

南方總局

昭南神社參拜

雨中八軒強行軍

常夏の都昭南にも雨季が訪れてコンノート・ドライヴの並木にも内地を偲ばせるそよぎをみる。十月十七日午前七時五十分（内地時間にして五時五十分）ギルステッドロードの編輯宿舎前に集合した同勢七十餘名は十六臺の自動車に分乗して千代田山跡へ快走する。ここで車を捨てて愈々行軍に移る。ジャングルを切り拓いて作った裏參道八キロは熱帯特有の珍木怪樹が兩側に茂つてゐる。行程半ばとおぼしき頃よりボツリ〜と降り出した雨は忽ちにして覆盆の土砂降りだ。この雨中を衝いて頑張り〜九時半頭にて全員勢揃ひした。久我少尉の號令一下隊伍を整へて神前に參進、皇軍勇士の英靈、特にこの地に血を流して靖國の杜に歸つた英靈に感謝し、吾等また挺身報國の職域に鐵火の奮闘を完遂すべく誓を新にした。なほ午前七時からプロック別宿舎において夫

々愉快な懇親會を開き睦しく打興するであつた。南方總局報、寫眞は昭南神社大鳥居前において豪雨の中で記念撮影のカメラに向つた一行、中央黒眼鏡が福岡支社長）

大阪支社

六甲登攀競争

産報各班團體訓練

十月十七日の新聞休刊日、大阪支社では六甲登山に鍊成、産報を活用し十名づつからなる各班が相援けあつて山嶺を極め、落伍者があれば順位を下げるといふ競争である。午前九時京阪神急行電鐵六



甲口驛裏の廣場に集合した二百餘の支社員は決戦服に身をかためて出發の合圖を待つ。先頭をきる末永班は午前九時二分勇躍進途につく。一分刻みに女子隊數班が續き本隊、青年隊と二十七班が僅々十分間に出發を了する。コースは選擇自由で各班苦心研究の秘中の秘だ。ロープウェイの建設急峻路に挑む班もあれば、ケーブル傍の斷崖を登る勇敢な女子隊もある。汗を流して足弱の班員を助け、班員の荷物をもつてやる協同援護にちりちりと標高六百八十餘メートルの記念碑跡決勝點を目指す。かくて十時二十分決勝點に入った竹村班を最初に順次到着した各班全員は午前十一時五十分整頓、國民儀禮を行ひ、結束支社長の激勵あつて持參の辨當に舌鼓を打ち解散した。（大阪支社報）

室蘭支局

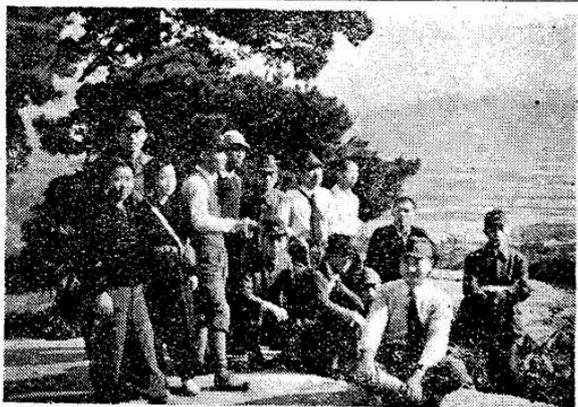
洞爺湖探勝

室蘭支局では決戦下秋の新聞休刊日を利用して思ふ存分北海の秋色深き山野跋涉に體位鍊成を行つた武裝凛々しく午前六時半室蘭驛を出發した一行七名は虻田驛に下車し、紅葉美しき山道を本道特有の山葡萄に山の幸の味覺を満喫しつつ洞爺湖に到着、ここで日の丸辨當の包みを開く。それから銀糸を垂れて腕自慢の大公望を競ふことしばし、午後二時湖水に別れを惜しみつつ壯麗から伊達紋別驛に出發、全行程七里を踏破して夕刻歸關した。（室蘭支局報）

長野支局

姨捨山に登山

長野支局の秋の鍊成會は本社通信部の多田君等を加へて神嘗祭の



す）かくて午後二時から同家所有の畑で芋掘りに興じ、各二貫匁程の芋を土産に頂戴して夕刻歸社した。（高知支局報）

關門、下關

坐禪鍊成三昧

秋の新聞休刊日、關門支社および下關支社員四十數名は聯合鍊成を行ふこととなつた。午前七時を期して長府の名刹巧山寺門前に集合する。初發電車を利用したものもあり、壇ノ浦から御裳川を経て夜行強行軍で徒歩で乗込んだ一團もある。門前まで整列國民儀禮の後一行は靜かに入堂する。塚本支社長より坐禪の心得と方法について説明あり一同正坐の上一齊に瞑目して坐禪の秘境に入る。約二時間坐禪の後本堂廊下の拭き掃除など勤務奉仕をなし和氣瀟々裡に散會した。關門支社報、寫眞は巧山寺における坐禪、下關要案司令部許可済）

高知支局

農場で熱汗三斗

新聞人鍛鍊の秋だ。十月十七日の新聞休日を迎へた高知支局では食糧増産と體位向上を目指して一行十名が市北部の秦泉寺農場に至り農事に熱汗三斗敢闘した。約百坪の畑を先づ耕し大根、ほうれん草、白菜などを播種したが、午後社員〇〇君の親戚に當る附近の和田貞吉氏方で晝食を攝り、抜き立の薩摩芋を御馳走になつた。娘子軍の食慾振りは御想像に任しま

菊池神社參拜

熊本支局では十月十七日菊池神社參拜を行つた。一行九名午前八時菊池電軌のガタ電に揺られつつ菊池郡隈府町に向つた。目的地に到着した一行は先づ別格官營社菊池神社に參拜、戰勝祈願、報國戰完遂を誓つた後發物殿を拜觀二十四代六百年に亘り盡忠の誠を捧げた菊池一族の忠烈を眼の邊りに偲び、やがて月見殿趾に至つて晝食の日の丸辨當を開いた。それから小雨の中をシドニー港の十勇士軍神松尾中佐を尊んだこの地の名所史蹟を見學して薄暮迫る頃菊池平野を後に歸途についたのであつた。（熊本支局報）

小倉支局

千佛鐘乳洞へ

北九州重工業地帯のまん中に翻とひるがへる同盟社旗、新設小倉支局が産聲をあげてから半歳を経た。新使命達成のため寢食を忘れて戦ひつづけた決戦の半歳を顧みると感慨が深い。十月十七日は支局員が始めて迎へた戦塵を洗ひ初の團體訓練を行ふ一日だつた。午前七時行軍を開始、目標は平尾臺を経て千佛鐘乳洞を見學し行橋驛に至る三十キロ徒歩である。雨中平尾臺を突破して午後一時十分鐘乳洞入口に到着、洞内九百メートル最奥所まで極めて不氣味な洞窟をつぶさに見學、一時間後洞外の明るみに出た。それより更に足を延ばして午後五時三十分遂に行橋驛に辿り着いた。（小倉支局報）

熊本支局

